

エンカウンター (ENCOUNTER)

第235号

2021年11月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「コリント人への第1の手紙講解説教」より (5)

幼子の如くなれ

自分がこの世の知者だと思ふ人がいるなら、その人は知者になるために愚かになるがよい。なぜならこの世の知者は、神の前には愚かなものだからである。(コリント I 3・18)

我々が何十年たっても信仰の真理が分からないというのは、自分が相当分かっているという自分の知恵に立てこもっているためです。これは、キリスト者が大いに大いに反省すべきところです。我々は他の宗教を批判し、何か自分が真理を独占しているかのように思っています。これは、キリスト者の多くが鼻持ちならない証拠です。謙遜な人はキリスト者以外にあります。私は、クリスチャンであるという人よりもノンクリスチャンの方に希望を持っています。これはどんなに信仰の深い人でも、どんな大学者でもこれを知る必要があります。それだから、パウロは、「本当の知者になるためには愚かになれ」と言っています。イエスが「天国は幼子の如くならなければ入れない」と言われた…。

Subservient (道具として有用な)

パウロも、アポロも、ケパも、世界も、生も、死も、現在のものも、将来のものも、ことごとく、あなたがたのものである。そして、あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものである。(コリント I 3・22-23)

コリントの時代も、現在も教会は分裂しています。私は無教会、私は教団などとガタガタやっています。口では言わないが、心で言っています。ちゃんと顔に書いてある。ここでパウロは、我々がもしキリストにあるならば、「すべてはあなたがたのものなのである」と言っています。パウロ何者ぞ、ペテロ何者ぞ、これは、皆キリストの召使です。サーバントです。ここは、大切な場所なので、大信者に来てもらってよく説明して欲しい場所です。…どの分派もすべて、私をつちかってくれていると言っているところです。英語で説明すると、サブサービエント (subservient)、即ち道具として有用な (useful as means) という意味です。「パウロも、アポロも、ケパも、世界も、生も、死も、…」これらすべてのものが救いに至る道具として有用であるという。今日は他の説教はみんな忘れてもよいから、この言葉をよく覚えておいてください。人でも、物でも、サブサービエントです。名誉、地位、業績、すべてのものが、「subservient to him」です。

内村先生の墓碑銘

内村先生は、ご自分の墓碑銘にこう書いてくれと言われました。「I for Japan, Japan for the World, World for Christ, and Christ for God.」(私は日本のため、日本は世界のため、世界はキリストのため、キリストは神のため)と。有名な言葉です。…だから、もし我々がキリストのものであるならば、すべてが我々のものであります。能力あることも、能力なきことも、我々の喜びも悲しみも、「subservient to the end」目的に向かってサブサービエントであります。ですから、悲しみも苦しみも、何もかも意味があるということが分かったならば、我々は失望しない。首をくくる必要はなくなります。キリストが「われは世に勝った」と言われたのはこのことであります。すべてのものはあなたに属する。キリスト教の救いとはこういうことを言う。「キリストにある」という事は、我々がキリストの一つの部分となる、ということであります。キリストの弟となることです。即ち、世界の主催者になるということです。世界の主催者になるとは、全てのものが自分にサーブしているということです。

この深いキリストの意義を少しでも理解したい。それによって、我々にパウロがロマ書第8章に示したような凱歌が生まれてくる。真の伝道とはこの世で教会を建てたり、伝道説教をするような小さなことではありません。伝道とは、この永遠不滅の光栄を手にして、この世を生きることあります。

ただ一向に称名すべし

イエスの十字架の贖いを信じ、主の御名を呼べば救われるというようなことは、人間の知恵で考えたら、愚かなことに見えます。愚かに見えるが、この「神の知恵」を本当に信ずる時に、我らに神の子であるという信仰と、復活の望みが出てきます。私は、ここで20年もこのことを話して来ました。来年、法然上人の開宗800年となりますが、法然は、「念仏を信ぜん人は、たとひ一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無知のともがらに同じうして、智者のふるまいをせずして、只一向に念仏すべし」（一枚起請文）と言われました。今年はまだ、親鸞聖人が生まれて800年になるらしいが、日本歴史において、一人の宗教家を挙げよと言われたら、私は法然上人をあげます。その学問において、その人格において、その識見において、この人をあげたい。この人が、この起請文の中で、一代の法をよくよく勉強していても、自分の知恵を捨てよと言っています。イエスは「幼子の如くならずば、天国に入る事能わず」と言われました。我々は、自分の知恵を捨てて、福音の知恵、十字架の救いの知恵をもう一度知りたいと思います。

本当の伝道者

パウロはイエス・キリストの十字架と同様、身をもって神への忠実を実行した人です。今となっては、パウロは教会の基礎を据えた大牧師とされていますが、当時の彼は、13節「この世のちりのように、人間のくずのように」されていたのであります。汚れた着物を着て、数人の仲間と共にとぼとぼと歩いていた姿は、誰が見ても、大なる教師とは見えなかったに違いない。しかし、信仰が与えられ、本当の福音の富を分かった人は、パウロを尊敬したであろうが、大部分の人は、パウロを理解できなかつたと思う。由来、俗人に尊ばれるような者は、本物ではありません。本当の伝道者は、寥々として暁天の星のように少ないと思う。現代においても、もてはやされる牧師は、学問が出来るとか、雄弁であるとか、たいてい、人間を喜ばせるようなものを持っています。内村先生でも、非常にかつがれたけれども、内村先生の信仰が分かって、先生をかついだ人は少ないと思います。大部分は、先生の雄弁とか、学識の高さなど、この世の魅力に引かれていた人々が多かつたように思います。その証拠に、同じ弟子でも、私の知っている金沢常雄先輩のように、福音だけという先輩を慕う人は極めて少ない。晩年に至るまで、2, 30人だけの集会でありました。福音というものは、万人にもてはやされるようなものではありません。

私にならうものになれ

キリスト・イエスにあって、福音によりあなたがたを生んだのは、わたしなのである。そこであなたがたに勧める。私にならう者となりなさい。(コリント I 4・15-16)

パウロは、福音を学べというよりも、毎日の生活を私にならえという意味の方を強調しているような気がします。我々の生活が、キリスト教の原理に従っていないなら、そして、謙遜な態度で生活していなければ、本当に信仰を見直すべきです。17節で、最後にパウロは、自分の子テモテをそちらに遣わしたから、信仰生活の手本として見習って欲しいと言っております。コリントの人々は、パウロ自身が出来ないのは、自分たちを恐れているからであると言う者がいたので、御心ならば、何時でも私自身が行く用意があると言っていきます。高ぶっている人の名前を知っていたが、パウロはその人の名をあげずに、力を見せて欲しいと言いました。20節に「神の国は言葉ではなく、力である」とあります。キリスト教は霊的な力です。これが、我々の信仰のバロメーターです。この力によって、我々に謙遜が生まれ、己に打ち勝つ力が生まれます。福音を宣べ伝える最終の目的は、この霊的な力を神から頂くことにあります。

信仰から来る霊の力

神の国は言葉ではなく、力である。(コリント I 4・21)

パウロは、最後に信仰から来る霊の力を見せて欲しいと言いました。イエス・キリストは、信仰の良し悪しは、その実によって分かると言われました。我々の信仰のバロメーターは、この霊の力、我々の善行であります。このことは注意する必要があります。聖書を講義したり、聖書を聞いたりしていることが能ではありません。そして我々は、もっと謙遜ということを学びたいと思います。…

我々はみんな仕事の違いがあります。我々は信仰を神様から頂いていますが、その信仰も人によって違います。だから、人の信仰を批判してはいけません。我々が頂いている信仰は、ほんの一部に過ぎません。その一部分の信仰を振り回して、他人の信仰を批判したらいかん。この教会においては、人の信仰を批判することをやめたまえ。特に、先輩、教師の信仰を批判するのはもっての外です。

「分を知る」これがキリスト教の愛の教えの先に来ています。ロマ書 12 章を読んで下さい。愛の教えを説く前に「汝ら、自分の分を知れ」と書かれています。謙遜が先ず最初であります。

「我にならえ」とパウロ先生が言われておりますので、私の生活を言いましょ。心では、天国を望み、口では、主の御名を呼んで、手では、手にくる業に励む。これが私のキリスト教であります。好きな人は真似して見て下さい。

イエス・キリストの血、すべての罪よりきよむ

6月の第1日曜日は、私にとって記念すべき日に当たります。大正7年(1918年)6月2日、小石川白山福音教会において洗礼を受けました。その数日前、ホーリネス教会の中田重治牧師が同教会において、特別説教を数日にわたってなさいました。私は、そのころ、第一高等学校1年生の終わりの頃でありました。先生が、「イエス・キリストの血、すべての罪より我をきよむ」という言葉をもって伝道なさいまして、その言葉が私の心に食い入りました。私は、当時、学生として自分の本分である学業に対し、また友人に対し、自分のなすべきことを尽くしていないという、自分の良心に痛みを感じていた時期にあったためと思います。先生のお言葉によって、私は洗礼を受ける決心をしました。それ以来、55年経ちますが、この「イエス・キリストの血、全ての罪より我をきよむ」という言葉が、私の信仰の土台となりました。私のキリスト教信仰は、年が経つとともにいよいよ明らかになります。が、「イエス・キリストの贖い」であります。私達のすべては、イエス・キリストの贖いによっているということです。非常に簡単でありまして、自分の持っている行ないにあらず、自分の信仰にあらず、自分の何ものにもよらず、イエス・キリストの十字架の贖いによいって、我々は義とされ、聖とされ、復活させられると。この単純なる真理が、55年経つに従って、いよいよ明瞭さを増してきました。

親 鸞

私は、学生時代、もう 40 年にもなりますが、ある先輩（倉田百三）が『出家とその弟子』という小説を書きました。そこには、親鸞聖人が、性の誘惑に負けた如き記事が載っています。親鸞聖人は、救われるためには、仏の力だけに頼るべきであることを説きました。聖人の 90 年にわたる生活は、実に聖者の真似のできない生活を送られた。これを知らずに、救いの面だけを見て、親鸞が青年の時、性欲に勝てなかったであろうなどと書くべきではありません。性欲や所有欲をコントロール出来ないような者は、万世の祖師となることは出来ません。由来、宗教の祖師は、みんな意思の強い人でありました。我々凡人が考えているような人とは違います。私は、パウロを見、ルターを見、この親鸞を見て、誰もが実に清らかな生活を送ったことを知っています。それだから、パウロは、この場所（コリント I 5・9-13）で、このようなことを述べたのであります。我々もどうか、聖霊のお助けによりまして、永遠の生命を受けて、我々の分相應に、道徳的な生涯を送る者になりたい。

10年後の感想

10年前の講義を聞いて、訂正することは何もありません。「救いは、我々の、と付く何物にもよらない」という原理は少しも変わっておりません。これが分かると、いよいよ、我々分相応に道徳を守る力が与えられる。「出家とその弟子」の話が出ました。私も学生時代これを読みました。親鸞聖人が青年の頃、性的な過ちを犯した如き記事があったような気がします。私は、この小説の著者はそうであったかも知れませんが、親鸞自身は、そんな性的な過ちを犯すような人ではないと確信します。そんな意思の弱い人ではありません。

要するに、我々のような落第生が、キリストの贖いによって、及第する。それは、我々の信仰、行ないによりません（ロマ書の原理）。この原理は変わりません。これ一本で行く。我々落第生は、イエス・キリストの贖いを振り回す。その時、本当の平安がある。この救いが如何に広く、深いものであるかということ、キリスト来給うときに、復活させていただき、永遠不滅の栄光に入ることが、本当に分かってきたら、この世において、行ない得ざる善はない。パウロの言葉を借りて言えば「我に力を与えるキリストにおいて、我等すべてのことをなし得る」のであります。パウロのみではない。我々も同じです。パウロは、信者に対して、高き道徳を要求しています。本日の場所の精神はそういうところにあります。